

## 【北大史学会:特別例会・国際シンポジウムの記録】

### 濟州島をめぐる東アジア海域交流史

2019年7月25日(木) 16:30~20:00 開催

於:北海道大学文系教育棟(軍艦講堂)文系6番教室

#### 趣旨説明

日朝・韓日関係史に限らず、東アジア海域史全体における濟州島(旧・耽羅国)の持つ意味は非常に大きい。地図を眺めれば分かるように、東シナ海の中央、やや北寄りに位置する同島は、航海上のランドマークとして極めて重要であった。島の中央には、韓国でもっとも高い山、漢拏山(ハルラサン)があり、遠くからでもよく見えたのである。

古代・中世の日中関係の航路は、しばしば東シナ海を東西に突っ切って往来するわけだが(これを「大洋路」という)、ひとたび南風に流されれば容易に濟州島に到達ないし漂着してしまう。また、14世紀の新安沈船の事例や、15世紀後半、濟州島から朝鮮ソウルの宮廷にミカンを貢納する際、暴風に流されて八重山の与那国島までたどりついた例(下記URL\*1参照)など、この海域をめぐる航海の困難さは数々の歴史ドラマを生んだ。

このように、濟州島をめぐる東アジア海域史は、たいへん興味深い歴史的素材に満ちている。最近では、国立歴史民俗博物館PR誌の『歴博』213号で濟州島の特集が組まれるなど(下記URL\*2参照)、前近代の濟州島の歴史に改めてフォーカスする機運が熟してきたともいえそうだ。

そうしたなか、当地札幌に、濟州島を専門とする研究者が集うということで、この機を逃さず、シンポジウムを企画した。日本古代史を専門として、10年以上濟州島に通う金善民氏にトップバッターをお願いし、古代・中世分野では耽羅名物のミカンを軸に「高麗の中華」を山内晋次氏に論じていただく。続く藤田明良氏には『増補耽羅志』という新史料を紹介しつつ、中世・近世の濟州島の虚像と実像に迫っていただき、歴史研究と歴史教育とをつなぐ視点から大西信行氏のコメントを仰ぐかたちをとった。

前近代の濟州島を通覧することができるとともに、東アジア海域史研究の新局面を切り開く集会だと自負している。主催の重要な一角を担ってくださった前近代ヨーロッパ海域史科研(下記URL\*3参照)との比較史的視座も提供してくれるだろう。御協力戴いた皆様すべてに、感謝の意を表したい。(橋本 雄=北海道大学)

\*1) [https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1J\\_vtmPCh8Nfa1k80TWD-QIJ9cfE&mid=1382413302&brcurrent=h3%2C0x34608726ebfe26cb%3A0x554cab3b4383026d&ie=UTF8&hl=ja&oe=UTF8&msa=0&t=h&z=6&vpsrc=1&dg=feature&ll=29.952116927802344%2C126.78296899999998](https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1J_vtmPCh8Nfa1k80TWD-QIJ9cfE&mid=1382413302&brcurrent=h3%2C0x34608726ebfe26cb%3A0x554cab3b4383026d&ie=UTF8&hl=ja&oe=UTF8&msa=0&t=h&z=6&vpsrc=1&dg=feature&ll=29.952116927802344%2C126.78296899999998)

\*2) <https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/213/index.html>

\*3) <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19H00546/>

#### 報告要旨

##### ①「濟州島(耽羅)と古代の日本 ―三無の火山島―」(金 善民=淑明女子大学校)

(1) はじめに 濟州島は東アジアの中心に位置する火山島である。古代の場合、濟州島には耽羅国が建国されている。しかし、耽羅国の形成過程とその実体は未だに明らかではない。それは韓国の文献史料に、耽羅国に関する内容が乏しいからである。幸いに、六国史などの古代の日本の史料には 耽羅国と日

本との交流を表すものが残されている。それは古代の濟州島の歴史を理解するためには最も重要な意味を持っている。

(2) 7世紀後半における耽羅と日本 『日本書紀』によると、耽羅は661年から686年まで20回使者を日本へ送った。また、日本も耽羅へ使者を派遣している。古代の場合、日本は朝鮮半島の国々と交流を深めているが、このように頻繁に使者が往来するのは特殊なことである。更に、使者の身分も耽羅王、王子、佐平（百濟の官職）など様々である。従って、耽羅と日本との関係は新しい観点から検討をする必要がある。にも拘らず、既存の研究では、派遣の背景などについては百濟滅亡以降新たな同盟国、或いは調貢国を求めためであると理解されている。使者派遣の背景と意味などを理解するためには、経済・文化的な側面を含む総合的な観点から分析を行う必要が求められる。

(3) 耽羅方脯と耽羅鮓 『延喜式』などに記されている耽羅方脯と耽羅鮓は耽羅と日本との交流を示すよい事例である。方脯は猪や鹿などの肉を干したものと解される。『周防国正税帳』によれば、周防国が耽羅方脯を購入しており、それは周防国が消費するためではなく、中央へ貢進する目的として購入したものと理解すべきだろう。また、耽羅鮓は、その性格が明らかではないが、皮を抜いてから干した鮑であると思われる。肥後国と豊後国で産出した一種の商品、或いは両国と耽羅との交易の産物である可能性もある。さらに、平城京木簡から、志摩国が耽羅鮓に関わっていたこともうかがえる。天皇家の食材を貢進する役割を担っていた志摩国と中央の間に耽羅鮓に関する知識や情報が共有され、その付加価値が分かっていたのであろう。

(4) 度羅楽 8世紀、雅楽寮の中に、外来楽として度羅楽の存在がある。既存の研究では度羅を耽羅と解釈するのが一般的であった。しかし、音声が類似していることで断定するのは無理が生じる。また、耽羅の別称として、度羅は見当たらない。古代の日本の史料には、一貫して耽羅が用いられている。度羅楽の実体も明確ではないままで、それを耽羅楽とするのは納得できない。むしろ、「楽戸から取ること62人」という数を考えると、日本列島の内部の楽舞であった可能性も考えられる。

(5) おわりに 古代日本の史料に記されている耽羅関係記事は、古代の濟州島の歴史を理解するために重要な意味を持つ。また、古代日本と濟州島との関係を理解することによって日本古代史の外延を広げることができる。

## ②「対馬島・濟州島のミカンと女真の馬 ——中華としての高麗——」(山内晋次＝神戸女子大学)

本報告では、対馬島から高麗国王へのミカンの貢上を物語る断片的な『高麗史』の記事を出発点とし、さらに同書および『朝鮮王朝実録』にみえる濟州島・女真からのミカンと馬の貢納記録などを重ねあわせていくことにより、高麗王権の中華秩序観を考察した。

まず、ミカンについては、対馬島および濟州島から高麗国王にそれが貢上された意味を探っていくと、高麗王権にとって自己の南方の海域世界に広がる蕃夷＝「島夷」の世界を構成するのが対馬島と濟州島の人びとであり、その人びとからは中国の経書『尚書』の夏書・禹貢篇の記述を典拠として、ミカンが貢上されなければならなかった、と推定される。

つぎに、馬については、『高麗史』世家の918～1170年の部分から、女真・靺鞨・鉄利・契丹・金などの北方諸族による高麗国王への朝貢記事を網羅的に拾いだして分析していくと、高麗北方の内陸世界に居住する女真を中心とする蕃夷の世界から高麗国王への貢上品としては、第一に馬が想定されていたことがわかる。

以上のようなミカンと馬に関する分析結果からすれば、高麗王権は、自己の支配領域の南方に広がる対馬島や濟州島という蕃夷たちの世界＝海域世界に対してはミカンの貢上を期待し、北方に広がる女真を中心とする蕃夷たちの世界＝内陸世界に対しては馬の貢上を望んでいた、と考えてよいであろう。つまり高麗王権は、南方の海域世界のシンボルであるミカンと北方の内陸世界のシンボルである馬を貢上させることにより、自己がそのふたつの世界を従属させる中華であることを可視化・実体化させようとしたわけである。

じつは、南方の蕃夷世界のシンボルをミカンとし、北方の蕃夷世界のシンボルを馬とする中華意識は、すでに南北朝期の中国においてもみいだすことができる。そこでは、南朝から北朝には黄甘が贈られ、北朝から南朝には馬が贈られていた。そしてとくに、北朝が南朝に対して黄甘の贈答を期待した根拠は、先述の高麗・朝鮮王朝の場合と同じく、『尚書』夏書・禹貢篇の記述にあったと推定される。とすれば、本報告が主題とした高麗王権の中華秩序観の問題は、さらに広い時空のなかで考察を深めていかなければならない問題であるといえよう。

### ③「ユーラシア東部の“盗賊島”：琉球王子殺害事件の真相」(藤田明良＝天理大学)

東アジアの航海者たちは古くから濟州島を、船を襲う島と恐れてきた。さらに18世紀には、漂流した島民が報復を恐れて出身地を詐称する慣行が顕在化する。その背景として、この島で琉球王子が殺されたという伝説の普及が指摘され、さらに伝説の母胎として1611年に起きた漂着船焼討事件が指摘されている。本報告では未紹介史料によって1611年の事件の実相を検証すると共に、琉球王子殺害事件という言葉の歴史的背景を明らかにしていきたい。

濟州島に関しては十数種の地誌が残っているが、1750年頃に成立した『増補耽羅誌』(天理大学所蔵)には、この事件の詳細な記事がある。それによれば、被害に遭ったのは薩摩の太守島津氏の家臣が乗る船で、「華郡公」との通交のために安南に渡航した帰途であった。大型で堅牢な外洋船に百人以上が乗っており、華人の老人が指揮をしていた。兵船で囲んで守備隊が岸から火を投じ、乗員は全員死亡した。地方官は、日本は既に通交していた琉球国王を生擒しており、安南と通交すれば朝鮮にとって外憂になると攻撃の理由を説明したが、彼らが生糸など巨万の積荷を略奪したことが発覚したという。この島津氏の通交船については、「華郡公」への復書案が外交僧の文集に残っており、華人を船主とする船に硫黄一万斤などを積んで、その年の春に安南へ向かったことが確認できる。

華人と倭人などが同乗する船は、16世紀中葉の後期倭寇から17世紀前葉の朱印船に至る時代、東アジアの海域交流の主役であった。朝鮮王朝は荒唐船と呼んで警戒し、華人については保護・送還を基本方針としたが、海防を担う地方官は功を焦って攻撃に出ること多く、朝鮮半島近海は倭人が乗る船にとって鬼門となった。1611年前後の濟州島では毎年複数の荒唐船事件が起きているが、1612年7月には琉球の進貢船が荒唐船と誤認され、給水のために上陸した乗員が捕縛されている。琉球王子殺害事件の言説は、この進貢船誤認事件と前年の薩摩船私掠事件との情報をもとに生成され、この時代を象徴する悲劇として拡散していったと考えられる。

海域交流を《上層：国家レベル》《中層：海商・禅僧・地域権力》《基層：船乗り・漁民など島嶼沿岸民》の三層に区分するなら、今回扱った「盗賊島」という認識は上層と中層の間の歴史事象といえる。他方で基層に注目すれば、14世紀の濟州島には舟山群島の「蘭秀山民」が自由に出入りし、15世紀には黄海の島々で活動する濟州島民が確認できる。このようなこの海域にひろがる基層のネットワークの復元を

丹念に積み重ねていけば、北方のオホーツク世界やユーラシア西北部のヴァイキングのような歴史像を描くことは、果たして可能であろうか？

#### ④コメント(大西信行=中央大学杉並高校)

当日行われた3本の報告はいずれも、近代以前の濟州島やそこにとどまらない東アジア海域の実相について、現在の研究の到達点を示すとともに、今後行われるべき研究の方向性をも示す刺激に満ちたものであった。

金報告について。『周防国正税帳』に記された「耽羅方脯」の価値はいかほどのものか。次に、山内報告について。高麗朝廷に献上されたミカンや馬はどのように再分配されたのか。藤田報告について。『増補耽羅誌』の増補部分が編まれた18世紀というのは、報告中でも言及されたとおり、東シナ海が「すみわけの海」の時代になってからのことである。その時にはじめて海域で起こった事件の顛末が地方誌に記されることは興味深い。どのような事情を想定しうるだろうか。

最後に、筆者は高等学校で主に日本史を教える教員である。その立場から、濟州島を含む「東シナ海域」という地域概念について問題提起したい。今日の国家が決して超歴史的なわくぐみではないことは専門研究者にとっては自明のことである。しかし、それが高校生を含む社会一般の通念になっているとは残念ながら言いがたい。そのことを教える素材として「東シナ海域」を扱うと、往々にして生徒は「東シナ海域」が近代国家のような均質な空間だと誤解する。その誤解をいかにして解き、その実像を高校生に、そして社会に伝えればいだろうか。

#### 討論要旨

3本の報告を終えた後、中世日本対外関係史を専門とする大西信行氏のコメントを頂戴した(上掲要旨参照)。これにより討論の方向性も定まったといっても過言ではなく、以下、大西コメントをベースに総合討論に突入した。まず、同コメントに対する回答を各報告者に求め、次いで、そのなかの重要とおぼしき論点を司会(橋本)がフロアの関係者も交えつつ議論を進める躰をとった。とりあげた論点は、ときに順不同だが、おおよそ以下のとおりである。

これまで耽羅(濟州島)由来と素朴に考えられていた「度羅楽」に疑義を呈した金報告をめぐって、「度羅楽」の起源や実演者については、東アジア古代史の水口幹記氏から補足的見解が示された。担当者の人数の多さから金報告の如く九州あたりの日本国内の人間として良からうとしつつも、その起源については今後の慎重な議論が必要とされた。また、「三多島」(石・女・風が多い)と呼ばれる濟州島において、塩業がどれほど行なわれていたかという点について、司会から金氏に追加説明を求めた。

次いで山内報告については、高麗史の外交や儀礼に詳しい豊島悠果氏から有益な情報提供がなされた。いくつかの関連するミカン献納の史実が教示され、山内氏の論説が補強された。また、中国南北勢力とのはざまにあった高麗史においては、時系列をさらに緻密に見てゆく必要があるとの注意喚起もなされた。なお、山内報告では意図的に割愛された武臣政権期・事元期における濟州島をめぐる国際環境について、モンゴル史の四日市康博氏から発言があった。同時期、濟州島がモンゴルの牧場と化したことは著名であり、その点と絡めて濟州島の生業等に関する補足説明がなされたのである。また女真族から馬が貢納された点については、これが果たして実態なのか演出(表象)なのかという点が大清帝国史の杉山清彦氏

から質疑された。山内氏はこれに対し、女真族からの馬の貢納という儀礼性・表象性が重要であったらう、との回答が示された。

最後の藤田報告については、新たに発見・紹介された『増補耽羅史』の構成や来歴に関する補足がなされ、なぜ18世紀になると『増補耽羅史』のような海域交流に関わる地誌・類書が作られるのかという点が議論となった。これと関連して、後期倭寇などの猖獗する16世紀には「襲う主体」が「地誌を書く(べき)主体」と重なることも重要だろう、という興味深い指摘もなされた。その他、海域交流をめぐる中央政府と地方との温度差など、海上交通史に関わる普遍的なテーマの数々が浮上した。

最後には以上の議論を引き受けつつ、ユーラシアの東西を視野に収めた比較史的な論点が、北欧史を専門とする小澤実氏(前近代ヨーロッパ海域史科研代表)から示された。①濟州島や対馬、五島、舟山などのような海域史上の重要ポイントの役割は何であり、どのように棲み分けていたのか(いなかったのか)、②海上交通における船や航海は物理的にどのようなものであったのか、③藤田報告の強調した上層(国家)・中層(海商・僧侶・地域権力)・基層(島民)の三層構造の腑分けは重要であり、とくに第三層目(基層)の部分は必ずしも文献史料のみでは追究し切れまい――。こうした提言や今後の課題を得て、盛況のうちに約1時間の討論は終了した。

遠方からも含め、約60名にのぼる多くの参加者を得ることができた。ひとえに報告者をはじめとする関係各位のおかげである。また、この顔ぶれと報告数からすれば、1日かけても良かった、という反省も当然出てこよう。そして当日、さまざまな論点が飛び出したが、それを掘り下げられなかった司会の不手際は何ともお詫びしようもない。ともあれ、今後のユーラシア東西をめぐる海域史研究の難しさと面白さが浮き彫りになった会だとは言えるだろう。なお、各報告は近くそれぞれのかたちで成稿されると仄聞する。ぜひともその成果を期待したい。(文責=橋本)